
闇に踊る物語

あくた咲希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇に踊る物語

【Nコード】

N2246Z

【作者名】

あくた咲希

【あらすじ】

別名義時代に書いたお話です。一時期サイトに載せていたような記憶。

稲穂は、やさしく老いた父母とともに暮らしていた。そこへ現れたのは、ほたる火をまとった、全身傷だらけの青年……。彼は、名を速風といった。

連載全14回。

ちよこつと色っぱい表現と、残酷シーンあり。ご注意ください。

序

黄泉^{よみ}のとびら。根の国に通じる道。

国産みの、神産みの母たる女神——死した妻を追ひ、国産みの、神産みの父たる男神は黄泉の国を訪れた。

しかし。

ふたりが夫婦だったのは、今は昔の話。

根の国の女神と天つ男神は袂を別ち、黄泉のとびらは閉ざされて、黄泉の闇は深き地下に追いやられ……。

天つ男神は川原にて襖をおこない、貴き三柱の神を産んだ。

左目より日輪。右目より月輪。

そして息吹より生まれし神は、その産声で母を欲した。

日輪たる姉神は、不憫な弟神を母がわりに愛し。

月輪たる兄神は夜の闇で、黄泉のとびらを隠した。

*

「もう、私には抱かれぬというのか？」

若き男神の吐息は猛々しく熱く、彼が呼吸しているというだけで女神の胸はじりじりと締めつけられ、焼け焦げるようだった。

無意識にかぶりを振りそうになるのをこらえ、唇を引き締めて頷く。彼が絶句した気配はなかったが、それでも一瞬、空気の流れが止まったように思った。

女神は顔を上げ、誰よりも愛しい弟神を見つめた。

「すべては秩序のため。わたくしは、手本となるべき神」

情に溺れてはならない、自分は、この天上の原を統べる神なのだから——。

ひとたび決意してしまえば、彼女の意味はなににもまさる誓いとなる。

「姉上は、私がお嫌いかな？」

希代の乱暴者と揶揄される弟神のおもてにふと現れた、すぎるよ
うなまなざしに一瞬どきりとしたが、眉を動かすことなくやんわり
否定する。

「わたくしがあなたを嫌いになるということはけしてありません。
そう、けして……ただ、心のほかで通い合うことはやめましょう。
そう申しているだけです」

「体を合わせずして何が通い合うと？ 想いは空気を伝わるとも
？ ばかな。触れなければ伝わらぬ」

弟神は片腕で空を薙ぎ、白い歯を剥き、鼻孔を膨らませた。彼が
怒ると、地までもがわななくようだ。

「わからぬことを申されるな。わたくしはあなたを愛しています。
それでじゅうぶんと受け取られませ」

今にも抱きすくめようとしてきた弟神を逃れ、女神は、そのつま
先から光の筋を立ち昇らせた。やわらかな衣の裾が鮮やかに色移り
かわり、やがて風をはらみ大きく膨れ上がる。

「姉上！ ばかな、ばかな——あなたをなくしたら、私は光を失っ
たも同じだ。なぜ、私にそのような仕打ちをなさるのだ」

懇願にも似た弟神の切ない声音が、姉神の誓いを揺るがせようと
する。

女神は白々とした手をつと伸ばしかけ、体の奥にばかりとした空
洞を感じた。

（わたしとて……）

統治神としての自覚に隠れた本心が声になる前に深呼吸をし、自
らが生んだ輝きに同化しようとした。

——その時だった。

鈍い衝撃が全身を襲い、光の消滅した足もとに女神はくずおれた。
閉じた眼の裏に、営みを止めゆく心臓にぬるぬるとした暗い長虫
が絡みつく幻覚が見えた。たおやかなのどは悲鳴を上げることでも
できず、またたくまに硬直してゆく。

女神は遠のく意識の中で、弟神の名を呼んだ。

——しかし。

かすれた声は、長虫に食われてしまった。

かわいいいくしゃみがひとつ、清水の跳ねる音とともに夜の曇天にこだまする。

「うー、寒い」

表面のなめらかな岩にしがみつくようにして、少女ははだかの肩を震わせた。

「おとうさん、おかあさん！ もう、出るから！」

ざば、と音を立てて冷たい水から脱出する。

川辺の小屋から、老いた両親が手に布切れをたずさえて小走りに駆けてきた。その布切れで、女の子のくせにふくらみの足りない体をひととおり拭くと、今度は丁寧に手足を撫ではじめる。

それよりも早く着物を着せてほしいと思いつつ、むしろ昼に水浴びさせてくれればいいのにと内心反抗しながらも、少女は親のなすままになっていた。

すでに七人の娘を手もとから失っていて、先もそう長くない老夫婦は、ただひとり残った末娘を蝶よ花よと育てている。

それはいわば手飼いの蝶であり、花であり……。

偏り、ひたむきすぎる愛情は時として狂気をはらむ。撥ねつければ、あたたかな手もたちまち獐猛な牙に変貌するのではなからうか――。少女はそんな妄想に怯えていた。

だから、小さな籠の中でしか飛べないことに不満はあるにしても、両親の前で顔に出すことはしない。

かわりにいつも、なるたけ笑顔でいることに決めていた。その成果というべきか否か、どんなに機嫌の悪い時でも仮面をかぶるより早く自力で微笑を頬に張りつかせるという芸当ができるようになって、少々、複雑だったけれど。

「おお……晴れてきた。月が見えるよ、稲穂^{いなほ}」

父の白く垂れさがった眉のかげから糸のごとき双眸が見上げた先

を、まず母が父とそっくりな眼差しでたどり、少女もまたそれに倣った。

生い茂る樹々のはるか上空にぽかんと浮かんだ、端のほんの少しかけた円は青白く、透きとおるようにひっそりとしている。

（今夜は一段と淋しそう）

稲穂は眉を八の字にさげた。

（抱きしめたい）

太陽は眩しすぎて目を向けられないけれど、控えめな光を放つ夜の月はやさしく、日のあるうちに姿を現す月は頼りなくて、無性に惹かれた。

（あなたは太陽の影。ほんとは、太陽のそばに行きたいのよね）

しみりしているうちに服を着せられ、両手を引かれて、稲穂は小屋の戸口をくぐった。

（あたしは、あなたの影なんだわ。きつと）

粗末な屋根は穴ぼこだらけのくせに空までは見えなくて、ただ、冬の終わりの風を迎え入れてギシギシと鳴っている。

背格好までよく似た父母に挟まれて、寝床に体を横たえながら、少女は月を想った。

*

（――朝、よね？）

さめたばかりの目をこすり、稲穂は横になつたまま首をかしげた。まるで厚い布きれで、小屋ごとすっぽり覆われたかのように視界が暗い。起き上がってまわりを見回してみるが、そばにいる両親の顔すら見えない。

まだ夜中かしらと言い合いながら、とりあえず火をおこして、戸口に置いた二段の器の中を確かめた。上はからっぽで、下には水がひたひたに張っている。

上の器にはごく小さな穴があいていて、寝る前に水をいっぱいに

入れておく、次に起きる頃にはすべて下の器に流れ落ちているはずで、やはり今は朝らしかった。

「太陽が寝坊してるのね」

珍しく両親より早く起きた稲穂が呆れて言うと、父も母も皮のあまつたのどを鳴らして笑った。

しかし、この不思議は気味が悪かった。

とはいえ、誰かに答えを求めようにもここには隣人すらおらず、普段どおりに一日をはじめよりほかはなく……。

朝餉の後片付けは稲穂の仕事で、水浴び場より少し下の、川が湾曲して浅くなったところで洗い物をした。

木をくりぬいて磨いた椀と、細い枝を集めてきて皮を剥いで揃えた箸は、砂利でこすったあと水の流れに任せてすぐ。そのまま流されていった箸は数知れず、今では水が淀まない程度に石を積み上げて、もしもの時のために備えている。

でも、ふが悪い時も当然あるもので。

箸は指をするりと離れ、あっ声を上げたときにはすでに堰の隙間を突破し、川下の暗闇へ消えてしまっていた。

稲穂は、手に残った四本を炎のあかりに照らして肩を落とした。流れていったのは、手で持つ部分に赤土をすり込んで色をつけた彼女お気に入りの一膳だった。

（追いかけるな。早く）

傍らのあかりに手を伸ばしかけて、ふと気づいて引つ込めた。携帯用の焚き火ではあるが、これは小さな石の碗底に据えつけた火種に木片をくべただけのもの。取っ手がついているわけではないので時間がたてばたつほど熱くなって、とても持ち運べるものではない。（しかたないわ）

ほかの食器まで流れないように置き場所をかえて、稲穂はすくと立ち上がった。だめでもともと、見つければ大幸運だというぐらいの気持ちで走り出す。

幸い、彼女には度胸があった。それと、暗がりでも多少は利く、

ころんとした愛らしい黒目がちの瞳も。

飛ぶように駆けて、砂利ばかりが目立つようになってきた頃、
指す先でなにか影が動くのをみとめて稲穂は足を止めた。目

ちゃらり、ちゃらりと川底ごと水をかきまぜるような音が聞こえてくる。

いまだかつて（焚き火の碗に触れた以外に）危険に遭遇したためしのない箱入り娘は、及び腰になることもなく、じっと目を凝らして得体の知れない黒い影を見た。

人かどうかさえもわからない。

そもそも両親以外に人を見たことがない稲穂である。七人の姉についてでさえ、時折り話に聞く程度。

だから、好奇心がうずいた。危険など、みじんも心配しなかった。ともかく相手に気づかれないうにと足音をしのばせ、一歩、また一歩と、影の輪郭がはつきり見えるところまで近づく。

すると、ずっと大柄だが、影もどうやら父母や自分と同じ人の形をしているらしいことがわかった。

（……？　なんだか、苦しそう）

ハッハッとかすれて破裂する息遣いが、夜と同じに冷え込む空気を伝わって彼女の鼓膜を刺激する。

「だいじょうぶ？」

思わず声をかけると、低い唸り声とともに影がぐらりと揺らめいた。

「ひゃあっ！」

胸もとを強く引き寄せられ、少女の体はくの字になって宙を飛んだ。

「——だれだ」

押し殺した声が血の匂いとともに目の前で吐き出された。

稲穂は顔をそむけ咳き込みながら、服をつかむこぶしに手を触れた。こぶしはひとつで少女の両手にあまるほど大きく、指の関節はひどくごつごつとしていて、小屋のあるところよりもさらに上流に

眺むる巖のようだった。

常ならぬ気配を感じ取り、稲穂は唾を呑み込んでそろそろと正面を向いた。

殺気立って光る二つの目が自分をにらんでいる。少女は叫びそうになった。

「なんだ、人のこどもか」

着物のいたるところに血を滲ませた男は、気を失わんばかりに顔を引きつらせた稲穂を確認すると、にわかに表情をやわらげた。

「箸が流れてきたから、誰かいるとは思っていたが」

すっと腰を降ろし、あぐらをかいてその上に彼女を座らせる。

「この暗いのに箸を追ってきたのか？ よかったな、そら。とっておいた」

「あ、ありがとう」

呆然としながら差し出した両手にひと組の箸を受け取って、握りしめてようやく稲穂は自分を取り戻した。

目をしばたたかせながら、血で汚れていてもそれとわかる端正な顔を見上げ、先ほどまでの鬼気迫るものはなんだったのかと訝しんだ。それと同時に、この人はどういう人なのかと考えた。

男は、父ほどに老いてはいないが深みのある低い声でしゃべり、白くはないが母のように髪を長く垂らしている。髪は乱れてはいるものの艶やかだ。耳たぶや手首足首では、きらきらした飾りが涼しい音を立てている。

手を胸にあてて、稲穂は遠慮がちに口をひらいた。

「なんて呼んだらいい？」

「ん？」

質問の意図がわからなかった様子で、男は目をまるくして首を傾けた。

稲穂は慌てて言い直す。

「あのっ、あなたが誰なのかわからないから、なんて呼んだらいいかと思ったの」

「ああ、名を知らぬと話にくいものな」

男は得心がゆくと、少女の頭を撫でつつ咳払いをした。

血の塊を川の流れに吐いてから、答える。

「私は速風^{はやなぎ}」

「はや……なぎ？」

「ああそうだ。はは、呼びにくいか。おまえの名は？」

「ええと。稲穂」

「稲穂か。きれいな名だな」

速風は口もとをほころばせた。

「ところで稲穂、もしよければおまえの村へ案内してくれないか。体はいいのだが、着物が欲しいのぞな」

「むら……は、わからないけど、服ならおかあさんがつくってくれるわ」

「そうか」

速風は片手で軽々と稲穂を抱え上げ、機敏な動作で立ち上がった。腰に佩いた剣の装飾ががちりと鳴る。もとはまっすぐだっただるう鞘はところどころが弾けて、青みがかった刀身がちらりと覗いている。

「かみのほうへゆけば、行き着くか？」

「うん。川のすぐそば」

「わかった」

もはや速風に苦しそうな気配はどこにもなく、川上つづくゆるやかな傾斜を、確かな足どりで歩きはじめた。

稲穂の耳のすぐそばで、彼の穏やかな吐息が聞こえた。血の匂いは消え、かわりに、萌え出たばかりの若芽に似た香りがする。

（春がきたような感じの人）

稲穂は本当は自分で歩くつもりだったが、驚くほど安定した抱かれ心地につい、うつらうつらとしはじめた。

（……あったかい……）

彼女が大きく舟を漕ぐと、速風は声をひそめてくつくつと笑い、

小柄な体を両腕に抱え直した。

「着いたら、私もひと眠りさせてもらつてほしいよ」

見知らぬ男を伴って帰ってきた、というより、彼に送り届けてもらう形になった末娘を、両親は顔を真つ青にして出迎えた。

「なんのためにこの山奥で暮らしておると思っておるのじゃ……！」
父も母も涙を流しながら、娘の無事を確かめるように手と言わず足と言わず、体じゅうを撫でまわす。

稲穂は面食らい、ぼろぼろの服で傍らに立つ速風を見上げた。

「私に説明を求められても困るよ」

彼は後ろ頭をかき、適当な岩に腰かけると、左手首に巻いていた金輪の束を外して老夫婦の眼前に突き出した。

「これと、新しい服を交換してくれぬか」

面食らったのは、今度は父母のほうだった。

黄金などそうそう拝める代物ではない。ましてや服の代金になど、釣り合わぬどころの騒ぎではない。

「あなたは、どちらの大君様で……？」
おおきみ

「そう畏まるな。ただの旅人だ」

狼狽する老人ふたりに苦笑しつつ、速風は右手首の金輪も抜き取った。菱形の金や半透明の玉を連ねた両足首の紐も解いて、稲穂に握らせる。

「酒があれば持ってきてくれ。そうだな……、稲穂は舞えるか？」

「歌をうたってもらえるなら、少しなら」

大好きな踊りを望まれて、少女の頬がぱっと色づいた。その様子を見て、速風はオヤという顔をする。

「存外、娘らしいじゃないか。さっきはこどもなどと言ってすまなかつたな」

「えっ？ あたしはおとうさんとおかあさんのこどもよ。速風は間違っていないわ」

稲穂の返答を聞いて速風が目を丸くするより先に、老夫婦が糸目

を三日月ぐらいにみひらいて悲鳴にも似た歓声を上げた。手を取り合い、白い頭髮を揺らして喜び合う。

「あなた様が、あの速風のみことか」

「なんだ、私を知っているのか」

速風は半跏を組み、袖で頬を拭った。

その横で、稲穂がきよとんと立ち尽くしている。

「おとうさん、おかあさん？」

「稲穂や。この方は、わしらの叔父にあたるお人じゃ」

「おじ。おじつて、なに」

「わたしたちの父様の弟君でいらせられる。生まれはわしらのほうが先じゃがの。ついこのあいだまで母神を恋しがって泣いておったというのに、なんと、立派になられたことじゃ」

「えっと……おとうさんとおかあさんの、おとうさんの、おとうと？」

父の言葉をゆっくりと反復しながら、最後の疑問は速風に向けた。彼はというと、なにやら気まずそうな顔で顎を撫でている。

稲穂は今にも手から取り落としそうだった金の飾りを父に押しつけてから、速風の膝に寄り添って顔を覗き込んでみた。

「よくわからないわ。どういうこと？」

「私の父と、おまえの曾祖父は同じだということだ。私はおまえにとつての大叔父だな。稲穂……、おまえは物を知らぬな」

「……ごめんなさい」

「いやいや」

速風は、混乱しつつしょんぼりする少女の髪をやさしく撫でてやった。

「私とて、血統などあまり考えたことがないからな」

稲穂にというより虚空に呟いた彼の目は、いちど暗い空に向けられ、やがて小屋の脇に焚かれた炎に落ち着いた。

彼の瞳の中で赤と黄が揺れている。夕陽の色に似ていると、稲穂は思った。

（でも、夕陽はきょうは見れないわね。こんな暗い空だもの）

二段重ねの器を一瞥し、稲穂は今の時刻を知った。火のあかりで過ごしていると、時の流れが止まったように感じてしまう。

しかし時は絶えず過ぎるもので、今頃はいつもなら母の手伝いで乾燥させた木の実を磨り潰して団子を作り、天日干ししている頃だった。母と父の時間感覚もまた麻痺している様子で、日常の仕事をすっかり忘れてしまっているようだ。

（ま、いつか。お酒、お酒）

稲穂は小屋の裏にまわり、甕にぴつちりとかぶせられた布のふたを慎重にはがした。

服より厚めに織られたそれに鼻をつけて嗅ぐと、頭の中がふわんと軽くなって楽しい気分になる。両親に見つかれば咎められることだったが、きょうは、ふたりは来訪者と談笑していて娘のしわざには気づきそうにない。

調子に乗って、何度も深呼吸してみた。胸がぼうつとあたためられてゆくようだった。そのうち鼻が利なくなり、見るものがぐにやり、ぐにやりと歪みはじめてしまった。

これには、さすがにまずいと稲穂も思った。

甕の中身だけはひっくり返さないようにとその場を離れ、ふらふら、ぺたん、と雪解け水でぬかるんだ地面に尻もちをつく。内腿がひんやりとした泥に濡れて気持ち悪かったが、いったん全身から力が抜けてしまってもう立ち上がれない。

（うわーあ、どーおうしょあ）

思考までろれつがまわらない。

しかも、だんだんと愉快になってきた。

（ふふー。ぐる、ぐる、ぐる……）

指で地面をなぞり、うずまきを描く。

（ひとおーつ。ふたつ。みい一つ。よっつ。いつーつ。むっつ。

ななあつ、やあ——）

八個目のうずまきを描き終わるやいなや、何物かが稲穂の細い左

足首に巻きついてきた。

ぬめりのある、うるこのざらりとした感触。

とろとろに溶けそうな脳みそも、その正体はすぐ知れた。

とっさに振り払おうとして足首に目をやると、炎のあかりでだらうか、体に苔を生やした蛇の丸い目が赤々と輝いていた。蛇自体はさほど苦手でもなかったのだが、よく熟れたほおずき鬼灯のような眼に見つめられて、稲穂は一瞬、身動きが取れなかった。

蛇はちろちろと先の割れた舌を覗かせながら、鎌首をもたげ、酔いのすっかりさめた少女をじっと観察でもしているかのよう。

稲穂が身じろぎすると、するすると身を滑らせて地面に降りた。

しかし、彼女のそばを離れようとはしない。

「おまえ……まだ寒いんじゃないの？」

蛇が去らないのを不思議に思っ、稲穂は小声で問いかけた。

「速風かしら？ あの人匂いに付られて、土の中から出てきちゃったんでしょ？」

すると蛇は緩慢な動きで茂みに向かい、しばらく葉や小枝を鳴らせていたが、稲穂が立ち上がる頃には完全に行方をくらましていた。「うん、もう少し寝てたほうがいいわ」

稲穂は腕組みをして二度ほど頷くと、服の裾で指を拭ってから息を止めて甕を覗き込み、瓢をそつと差し入れた。なめらかな液体を少しかきまぜ、手近にあった深い椀に注ぐ。

客人用の酒を地面に置くのはなんとなく気が引けて、稲穂は片手でどうにか元通りふたをしめ、中身をこぼさないように注意して速風のところへ戻った。

「すまぬな、ありがとう」

椀を受け取り、すぐに飲むでもなく、速風は稲穂の姿を心配した。

「えらく泥だらけだな。ころげでもしたか？」

「え。ちょ、ちょっと足もとが狂っただけ。だいじょうぶ」

「でも、血が出ている」

指摘されてはじめて、稲穂は左の足首が赤く染まっていることに

気がついた。

蛇が触れた場所だ。知らぬまに噛まれてもしたのだろうか。しかし痛みはなく、じつとりとした熱もない。

「だいじょうぶよ」

「おまえたちは、怪我で死ぬことがあるのだろうか？」

速風は腕を老父に預けると、老母にとりあえずの衣を所望した。

「私も汚れを落としてくる。こい」

彼は稲穂を抱き上げ、あかりもなしにせせらぎのほうへ向かった。

川べりの平らな岩に彼女を降ろすと、彼は水に入りながら、すでに破れかけていた着物を引き裂き裸体をあらわにした。

「あ……れ？」

稲穂は目をこすった。何度こすってみても、速凧の背中がほのかに光を放っているように見える。おかげで辺りもつつすらと明るい。（お酒のせいかしら？）

夜目が利くとはいえ、これほど鮮やかに浮き上がって見えるのはどこがおかしくなつたからではないかと疑った。

しかし速凧はなにを気にするでもなく、水面に反射する己に驚く様子もない。

「こつちに足を出せ」

腰まで水につかり、彼は長い髪をかき上げながら振り返った。

稲穂は腰を降ろし、言われたままに左足を差しだした。太陽に温められないままの川水は痺れるほどに冷たく、その中で、肌に触れる指先だけがあたたかい。

「ん。なにもないな」

速凧は、少女の足に傷ひとつないことに眉をしかめた。

「中つ国なかつくにに降りて久しいと、変若おちの力が衰えると聞いていたのだが」

「変若？ それならわかるわ！ 変若おちつて、あつというまに怪我や病気が治るんですよ。おとうさんとおかあさんはそれが弱くなつたからあんなに髪が白くて、体もしわしわになつたんだって言ったわ」

知っている言葉を聞いて、稲穂は得意げに胸を張った。

しかしすぐに、しょんぼりと背を丸めてしまう。

「あの蛇が怪我をしていたのかも」

勘違いして冬眠から醒めてしまった、かわいそうな蛇である。

稲穂は足で水をかきまぜながら、茂みに這っていった弱々しげな

後ろ姿を思い出した。

「だいじょうぶかな。あのこ、死んだりしないかな」

「か弱い生き物でもあるまい」

清水にもぐり、黒髪を扇状に広げた速風が笑った。

「長虫を氣遣う娘というのも珍しい。おもしろいな、稲穂は」

「おもしろいつて」

「褒めたのだ。そら、おまえもこい」

水中から手を伸ばし、速風は服を着たままの稲穂を引きずり入れた。

幼い胸の内側で心臓が身をすくめ、少女は体を縮こませる。

「おっ、おとうさんたちなら死んじゃってるわ！」

かぶりを振って水滴を散らしながら抗議すると、

「はは、すまぬ」

速風はひとつも悪いとは思っていない様子で謝り、稲穂を抱きすくめ、そのまま水に沈んだ。どうやら彼は、もがく稲穂を見て楽しんでるらしい。

ふたりが吐き出す泡にまみれながら、速風は彼女の額に頬を寄せた。

「ぷはっ！」

抱きかかえられたまま水面に顔を出し、稲穂は蒼白な顔で肺に空気を取り込んだ。

遊ばれていたことに気がつきはしていていたが、それを怒る気力も失せてしまっている。

——本当に、死ぬかと思った。

速風の胸にしがみついて必死に呼吸を整えるが、自分をこんな状態にした張本人に頼るようで正直、おもしろくない。

そこへ、とどめの一打がきたからたまらなかった。

「もう少し娘らしくなったら嫁にもらってやってもいいぞ。——まあ、嫁と言ってもおまえはなんのことかわからぬのだろうがな」

声も高らかに笑う彼を、稲穂は目に涙をためてにらみつけた。

（なによ、よくわからないけど、ばかにして！）

視線を受けて、速凧がおどけて言う。

「なんだ、それとも知っていたか？ そら、どういふことなのか説明してみろ」

「う……」

実際なんのことやらで、唇を引き結んで耐えるいたいけな少女は、ただ悔しくて、思いあまって彼の顎めがけて頭突きを繰りだした。

「もう、踊ってなんかやらない！」

むちゃくちやに暴れて屈強な腕から逃げ出して岸に這い上がり、精一杯の大声で叫んで小屋へ引き返す。

（ちよつとものを多く知っているからって、ああいうのはひどいんじゃない？）

娘の結婚を希望したのは、実は老いた父と母だということを知りもせず……。

速凧の悪口をいっぱい連ねながら帰還した稲穂は、情けない顔をした両親に出迎えられることになった。

「こんなことなら、もっと人並みの育て方をしておくべきだったよ」
がつくりと肩を落とした親にそんな後悔をされ、我慢していた涙がいつきに溢れ出す。

（なに？ やっぱりあたしが悪いの？）

頭はずきずきするし、体はガタガタ震えるし、いいとこなしで泣くしかない。

もとより、あまり泣くことに慣れていない稲穂である。月を想う以外に、悲しいとか、辛いとか、はたまたひどく嬉しいとか――心を震わす場面に遭遇した経験はついぞない。

水の中にいるよりも、胸が苦しくてたまらない。せめて空に月が輝いていれば慰められたのに、暗いだけで、今はまだ昼間なのだ。

かなり時間が過ぎてから、衣を腰に巻きつけた速凧が戻ってきた時も、稲穂はまだ泣きじゃくりながら天上を仰いでいた。

——夢の中に立っている。

稲穂はぼんやりとした気持ちで、心地よい綿雲に包まれて目を細めていた。

見えるものは、薄くもいろに染まった雲と、幾重にもひだを折るかすみ。

暗くはないが、かといって明るくもない。

すべてがあやふやで、風もなく、静かで穏やかで、ほんの少しのけだるさを感じるのみの空間。見慣れた景色とは正反対で、ふたしかで、でもそれが不安ではない奇妙さ。

（こんな夢、初めて）

昼間、あれだけ激しく泣いたせいだろうか。胸の内のものをこれでもかと吐き出したあとは、確かによくわからない感覚に陥った。頭を動かすこともなく寝入ってしまったから、こんな夢を見るのだろうか。

稲穂はつま先を伸ばし、ゆっくりと目を開けた。

途端に視界に現れる巨大な山。いや——それは山ではなく、絡まりあった幾百万もの蛇。

体は苔むし、眼は赤く。体を、燃える炎に包まれている。

恐ろしげだが、その姿は稲穂を惹きつけた。

「だいじょうぶ？」

ついと小さな口を出た気遣いの言葉に、蛇たちはいつせいに咆哮を上げた。綿雲が吹き飛び、かすみが血の色に染まる。

蛇の山の向こうに、山が小さく見えるほどの白い円が、まわりの風景から滲み出すようにして燦然と輝きはじめた。

（太陽？　ようやく目をさましたの？）

だが、白銀の光に包まれた円ははつきりと輪郭をみとめることができ、昼の空に陣取る太陽とは違う似ても似つかない。

ふと、辺りが闇に呑み込まれた。

稲穂は円の正体を理解した。きのうの夜に遠く見上げた月が、今、こんなにも近い。

目の前に迫る円は、輝きながらもどこか冷め、憂いに沈んでいるようでもあり、その儚さに稲穂は心奪われた。

（あたしはあなたの影。あたしは、あなたを抱きしめたい）

少女は腕を広げ、月に差し伸べた。

山が崩れ、手首足首に蛇たちが絡みつく。どろりとした紅の液体が華奢な体を染め上げてゆく。

月は血色のうずまきに侵食され、やがて稲穂の身長の数倍ほどの、一匹の白い蛇に変化した。青白く淡く光る鱗に覆われた表面に、きらきらと銀色のかげらが浮き沈みする。

「あなた、なんて呼んだらいい？」

少女の問いかけに、身に星を散りばめたような白蛇は赤い目を細めて答えた。

「私は月夜^{つぐよ}。そなたは……稲穂」

「どうしてあたしの名を知っているの？」

「そなたはいつも私を見ていた。私もそなたを見ていた」

稲穂に巻きついていった蛇たちはいつしか消えていた。

かわりに、繊細な銀糸を縫り合わせた輪が幾重にも重なって、瑞々しい肌を飾っていた。稲穂は右の手首を顔の前に持ってきて、浅く息を吐きながら、細やかな光の粒を見つめた。

「あなたが本当に見ているのは太陽だわ」

「そなたはそれを知っているのも、私を慕うのだろうか？」

蛇は姿を人に変えた。純白よりも白く透き通る衣に身を包み、そのおもては速風とよく似ていると稲穂は思った。

耳の上の小さなみずらは、やはり銀糸を縫った紐に結われている。背を落ちる黒髪はところどころがうねるように波打ち、蛇を連想させた。

「太陽は月を見ぬ。されど月は、太陽に焦がれる」

月夜は稲穂を抱き、速風に似た、より繊細で、それでいて深みの

ある声で耳もとに囁いた。

稲穂は彼の背にそろそろと腕をまわした。髪を撫でれば、指に吸いつくようだ。

「あなたが太陽に焦がれているのはわかっていたわ。あたしはこうしてあなたに触れて、抱きしめることができた。じゅうぶんだわ」満ち足りた気持ちにはほど遠かったが、胸になにか、あたたかいものが灯ったのは確かだった。

しかし、光があれば闇もまた生まれる。その灯りが黒々とした影を引いたことに、稲穂は気づかない。

月夜は音もなく笑うと、稲穂の首筋に片手をあてがい、もう片方の手を服の内に滑り込ませた。手は幼さの残る体を撫で、やがてそれは愛撫に変わった。

（蛇がのぼってくる）

足先から内腿へ向かって、生あたたかな物体がぬらぬらと移動している。

稲穂は揺らぐ視界の中に、赤い海に沈む月を見た。

暗い目覚めだった。

くわえて熱っぽく、下半身にいたっては痺れてひどくだるい。

「おとうさん、おかあさん……」

発した声は、からからに乾いていた。そのくせ肌は粘るほどに湿っていて、寝着は体に張りついてくしゃくしゃだった。

「おまえがつづけて早起きするなんて、なにかおかしいことの前触れじゃないだろうね」

片肘をつき、体を起こしながら母が言った。

「それとも、太陽がお隠れのせいかねえ。まだ夜中だよ」

老化のすすむ手で娘の顔を撫でさする。

「なんだね、えらく冷たいじゃないか」

「え……。でも、熱いよ……。すごく」

「どれ」

稲穂の体の異変に気がつくと、酒臭いいびきを立てる夫を起こさぬように、娘をつれて小屋を出た。

外では、皮膚にほたる火のような明るさをまとわせた速風が上半身はだかで空を見上げていた。

「おはよう……と言うには、まだ早いな」

いくらか生氣に欠ける声音だった。振り向いた顔もどこか虚ろで、悲しみさえ匂わせるよう。

「さしもの速風のみことも、こんな真つ暗闇では気力が出ませぬか」

「はは、ただ中つ国が慣れぬせいだよ」

髪をかき上げ、速風は寄り添い合う母娘に近づいた。

「どうかしたのか、稲穂は。きのうの水浴びがまずかったか」

稲穂は文句のひとつも言いたかったけれど、億劫で、ため息をつくだけで無視をする。

母は取り繕うように笑顔を作り、猫なで声で速風をうかがった。

「まだまだこどもで。もう少しお待ちくだされな、今に娘らしくなりますよ」

「それは楽しみだな」

さして愉快そうでもなく乾いた笑い声を一つ立て、髪を払うと速風は川上へ歩いていつてしまった。淡い光に引き寄せられたらしい地鼠が一匹、彼を追う。

母は無愛想な娘を咎めることなく、川原へいざなった。

汗に乱れた服を脱がせ、枯渴した地面のごときてのひらに水をすくう。いくらか温めたのちに稲穂の肌につけ、懷から取り出した布きれでこするようにして、赤い穢れともども隅々まで拭つてやつた。「これでおまえも立派な娘。花嫁の衣装を仕立ててあげよう。八千やち亦に見顯またされる前に、みことのような貴き天あめつ神と出会えて幸運だったよ」

「はなよめ？ やちまた？ あめつ……かみ？」

熱がうつすらとひいて、いくぶんか晴れやかになった頭で稲穂は繰り返した。

「あの人。速風は、なにか特別な人なの？」

「速風のみことは、天上の原にまします日輪、晝女ひるめのみことが弟君。天つ父神が根の国の女神と決別されたあとに、おひとりでお産みあそばされた御子じゃ。女神の血を引く我らにとって、みことはすべてをあますことなく照らしてくださる方。稲穂、おまえはみことのおそばにお仕えするのじゃ」

稲穂はいかにもわけがわからないという顔で聞き返すような素振りを見せたが、老母は少し眉をひそめただけで、話をつづけた。

「おまえの七人の姉は、みな八千亦のもとへ行ってしまった。親の制止も聞かずに。やつらのために我らが里は失われてしまったというのに、じゃ」

怒りを隠そうともせず語る母を、稲穂は初めて見た。

恐ろしかった。酒を嗅ぐのを露見された時とは、くらべものにならないほどに。いたずらを叱る時の表情とはまるで違う。

「じゃが、みことの力をもつてすれば八千亦を退けることも可能ぞ。八千亦なぞが、天つ神であるみことに敵うわけが……これ、どこへゆくのだ！」

はだかのまま、稲穂はたまらず駆け出した。駆けながら、腿の内側を蛇の亡骸のようなものが伝い落ちてゆく感覚に怯えた。

闇の中を下流へ走った。石ころが砂利に変わり、さらさらの砂になった。

やわらかなくぼみに足を取られ、ころんだ。

衝撃にかぶりを振りながら顔を上げ――、稲穂は、赤い月を見た。
(こんな月、どこかで……?)

せせらぎとは違う、水が打ち寄せる音が辺りに響いている。

(海だ)

山中の小屋付近のほかに彼女が唯一、知っている場所だった。年に一度、塩を得るために親子三人でやってくるのだ。

冬に、しかも夜に訪れたことはなかったが、潮風は変わらず鼻先に磯のかおりを運んできては耳もとの髪を梳いてゆく。

体についた砂をはたき落とすこともせず、稲穂は波打ち際へ近づいた。くるぶしを砂まじりの波が撫ぜては、彼女を誘うかのようにゆつくりと引き返す。

鬼灯に似た今にも溶け出しそうな満月は、まるで稲穂ひとりを見つめるかのように真正面にそびえている。

「すべて、満ちた」

突然、聞いたことのない声が頭上から降ってきた。稲穂は顔を上げた。

「俺のもとにこい、稲穂」

腕と胸の筋肉を盛り上がりさせた壮年の男が、自分の名を呼び、手を差し伸べている。

「あなたは……？」

「俺は八千亦」

母が憎む者の名をなのった男は、稲穂を抱きかかえ、海風に髭を

なびかせ哄笑した。

「これで数が揃う。悲願が叶うぞ」

「ひがん……？」

聞き返すと、八千亦是目を細めて頷いた。器用に片腕で稲穂を支え、もう片方の手で小さな鼻と青ざめた唇を覆う。

稲穂は逃れようと身をよじった。

幾年を経た酒に似た、妖しい香りがした。ふ、と意識が遠くなる。

「夢も見ぬほどに、深く」

静かに脳髄にまで響く声が、少女の意識を眠りの淵へといざなうた。

*

息苦しさをおぼえて稲穂は目を覚ました。

景色は闇から一転し、大気は赤々と照らされている。

眠っているあいだに連れてこられた場所は、父母の住む山とは連なっているようだったが別の山の中腹の、熱気と湿度の高さに眩暈がしそうな踏鞴場たたらばだった。夜だというのに、男女入り乱れて大勢が威勢のいい掛け声を上げて働いている。

稲穂はただただ目を見張った。初見だったし、ここがなにをするところなのかもわからない。くらくらする頭で、ただ、ここは慣れない人間には呼吸もままならず、むき出しの肌にはとても耐えられない場所だということだけ痛いほどに思い知った。

「起きたか。待ってる、今、きれいな衣を着せてやるよ」

八千亦是稲穂をかばうように身をかめると、大きな体躯に似合わない素早さで作業場を駆け抜けた。

向かう先に、小屋の何十倍もありそうな横長の屋敷が見える。戸口に女が七人、手に色とりどりの衣を持ち待ちかまえている。

彼女たちは八千亦から稲穂を預けられると、いっせいに歓声を上げた。

「あなたが稲穂ね！ わたしがいちばん上の初芽よ」はつめ

彼女を皮切りに、娘たちが次々と自己紹介をする。

みな花のように美しい。艶やかな服はもちろんのこと、姿かたちまで若々しく生気に溢れている。

「感動のご対面だな」

八千亦是豪快に笑い、

「変若の力というものは素晴らしいな。俺も早く手に入れたいものだ」

そう言い残して、賑やかというより騒がしい踏鞠場へ踵を返す。

ふつと意識が遠のきかけて、稲穂は初芽に寄りかかった。

「まあ、稲穂、あなた」

姿勢が変わったためか、稲穂の股を勢いを増した幾すじもの赤が伝いはじめている。

「まさか、初めての？ …… なぁに、なんにも教えてもらっていないのね」

無知を罵られるかと思いきや、逆に気の毒そうな顔をされて、稲穂は思わず安堵した。

屋敷の裏口に通され、ほかより一段高く設えられた木の囲いに、溢れるほどに張られていたあたたかい湯で身を清められた。気分よく踊り出したい気になっていると、なにやらゴワゴワした布を股に挟まされ、ひどく心地悪い思いをした。

「あのう……」

末の妹にどの服を着せようかと騒ぐ姉たちに、稲穂はうかがうように声をかけた。

「これに決定」

薄紅色の衣を大事そうに抱え、初芽がそばへやってくる。

「どう？ これ、きつと似合うわよ。ちよつと派手なぐらいがいいわ」

「あのう、八千亦って人は、どういう人？」

着替えを手伝ってもらいながら、稲穂は気兼ねしつつ尋ねた。

「あの…… おかあさんは、その……」

「父と母の里が洪水でだめになったのは、確かにこの踏鞴場のせいよ。山をひらき川を堰き止め、でもそれは必要なことだったわ」

姉たちは頷き合い、声の調子を低くして顔を寄せ合って口々に言った。

「そうよ、おかげでここは豊かだわ」

「父さんたちも我を張らずに、この里へ移り住めばよかったのよ」
「いつの八千亦もよくしてくれるわ」

「今の八千亦なんて、どのだれよりも強いのではないかしら」

「中つ国で彼を知らない者はいないわ」

「天上の原にもその名がとどろくと聞くわ」

とりあえずすごい人だということだけはわかって、しかし母の言葉
を思い出し、稲穂はさつと青ざめた。

（八千亦を退けるといふのは、やつつけるということよね）

不穏なものを感じて、胸がざわざわする。

（ここをどうするの？ ここにはねえさんたちも、いるのに）

初めて会った時の速風の姿が、七人の姉と、八千亦という踏鞠場の
の主と重なる。

血のにおい。いくつもの傷。

苦しげな呼吸――

（変若……）

その言葉を、速風も、八千亦も使っていた。

怪我や病を治す力。そして、若返りの。

（速風には変若の力があつて。おとうさんとおかあさんにもあつて
その力が弱くなっちゃったから、あんなに白い頭でしわくちゃで。

じゃあ、ねえさんたちは……あたしは？ でも、八千亦にはなくて
……）

彼は、変若を早く手に入れたと言った。

（どうやって？）

――これで数が揃う。悲願が叶うぞ。

赤い月に照らされた浜辺で、八千亦が口にした言葉の意味は……。
稲穂はひらひらした薄紅色の衣を引きずりながら、外を望む窓の
そばへ寄った。

森はひらけていて、太陽のある昼間であれば遠くまでよく見える
のだろう。踏鞠場から漏れるあかりが、地肌が剥き出しになった山
の斜面を照らしている。

（おとうさん、おかあさん。速風も……）

最後に見た、上流へ向かう彼の後ろ姿がやけに鮮明に、脳裏に焼きついて離れない。

（ねずっこを連れて、なにをしてるのかしら）

知らず、口もとがゆるんでいた。

死にそんな思いをさせられたというのに、これは、どうしたことだろう。

（——あつ。そうだわ）

稲穂は手を打った。

いつのまにやら稲穂の髪をいじりはじめていた姉たちに、一つ、質問をする。

「ねえ。およめになるって、なに？」

すると初芽たちは一様に顔を赤らめ、急にもじもじとしはじめた。

「……それは、契りを結ぶということよ」

またも聞きなれない言葉を聴いて、稲穂は眉を八の字にする。

「ちぎりって？」

「もう、そんなこと知らなくていいのよ。説明させないでよ」

姉たちは手早く髪を結び上げると、袖で顔を隠しながら奥へ引込んでしまった。

（変なの）

頭の左右に作られた髪のかを指でいじりながら、稲穂はすべすべした窓枠に肘をついた。

（教えてくれる人、いないかしら。もう、知らないのはいやだわ）

自分の体に今なにが起こっているかさえわからない。怪我をしたわけでもないのに、血が流れたしつづけている。たいして痛みもないので恐ろしいとまではいえないが、もしこのまま止まらなかったらと思うと気味が悪くもある。

つい数日前までは、無知でも平気だったのにと稲穂は嘆息した。なにが変わってしまったんだろう。どうして、変わってしまったんだろう。

（速風があの時、からかったりなんかせずにおよめの意味を教えてください）
くれればよかったんだと思うわ）

でも。それならそれで、無知を厭う自分は生まれなかったかもしれない。今の自分も、そう悪くはないのかもしれない。

だとすれば、自分に、変化をもたらしたのは……？

（速風なら、ちぎりのことも知っているかもしれないわ）

彼にもういちど会いたいと、踏鞴を踏む音に耳を傾けながら稲穂は思った。

*

白い蛇がこちらに背を向けている。

「月夜」

稲穂が呼ばうと、蛇はほんの少し振り向きはしたが、興味を失ったようにあつさりと前を向いた。

——太陽は月を見ぬ。

されど月は、太陽に焦がれる。

「月夜！」

月は、少女を見ぬ。

けれど少女は、月に焦がれる——？

恋しい相手が、いたづらに振り返るのを待つばかり。いたづらに触れられるのを待つばかり。

稲穂が踏鞴の里へやってきてからはや半月が過ぎ、相変わらず闇に沈む昼間に、山頂へ行こうと言って八千亦が八人の姉妹を連れだした。

初芽たちに心配されるほど長くつづいていた稲穂の出血は、昨晚になってようやく、なにか夢を見ているうちに止まったようだった。しかし体調は思わしくなく、ゆるやかな山道でさえ足がもつれた。八千亦が気遣ってくれたが、姉たちが妙な視線を送ってくるので、負ぶわれるのは断った。

いったい、どれだけ歩いただろう。踏鞴の里から山の頂までそう距離はないはずだった。

なのに、闇のせいだろうか……途中から、足を一步ふみだすたびにふわふわとした雲を踏むかのような、うつつにしては不確かな感覚がつづいた。

空は、やはり濃い墨を流したように暗い。

ひらけた頂には高床の社が建てられていて、階きざはしをのぼると、暗い入り口の向こう正面に簡素な祭壇が見えた。両端にはかがり火が焚かれ、榊の葉が照らされて奥の壁へ長い影をつくっている。

「初芽から順に並んでくれないか」

八千亦が言い、八人の姉妹は二つのかがり火を先頭にして交互に向かい合って座った。

娘たちの中心に八千亦がどつかと腰を降ろす。そして、抱え持っていた長細い包みを紐解いた。

「八代かけて、ようやく満足のゆくものが仕上がった」

包みから現れたのはひとふりの剣だった。すらりと伸びた刀身の中間には厚みがあり、柄の部分は握りやすくするためか螺旋状になだらかな凹凸が施してある。

八千亦は剣を素手で取り上げることにはせずに、包みの布ごしに捧

げ持ち、膝を進め、祭壇の真ん中にそつと降ろした。

「国つ神の娘らよ。祈ってくれ、俺のために」

なにをするのかと首を傾げる稲穂の前で、初芽たちは目を閉じ胸の前で指を組み、ややこうべを垂れて、呼吸すらも止めたかのように静かに祈りを捧げはじめた。

（こう……するのかしら？）

みようみまねで姉たちに倣うが、末の妹の精神は統一されるはずもなく、となりを盗み見たい気持ちを抑えるので精一杯だ。

実のところ、きょうこの日までに姉たちが、稲穂にことの詳細を説いておくはずだった。しかし顔を合わせるなり稲穂が「ちぎり」について聞きたがるので、それを避けているうちに、ついぞ機を逃したままになってしまっていたのである。

（目はいつ開けていいのかしら。八千亦が声をかけてくれるのかな）
稲穂の期待など知るはずもなく、八千亦は居住まいを正し、祭壇に一礼をした。

「山は高く、天にかける橋、月より落つ変若の水……」

神妙な声音で唱えながら、横目で娘たちを確認する。

口もとが、隠しきれない笑みで歪んだ。目に鋭い光が宿り、興奮のために小鼻が膨らむ。

八千亦は、祭壇の剣を素手につかんだ。

音もなく立ち上がり、剣を構え、初芽に切っ先を向ける。

「赤の呪——白き剣に、力を！」

娘の細い首を、白い閃光が横一線に薙いだ。

吹き上がった血が残像を真っ赤に染め、八千亦の顔にも吹きかかる。

ごっこん、と鈍い音がした。

（なあに？ 今の……）

姉たちが息を潜め身じろぎする気配に、稲穂は目を開けなくなった。迷っているうちにもごっこん、ごっこんと音はつづき、五つ目の音が聞こえたとき、突如として社を震わす悲鳴が上がった。

稲穂は目を開けた。

そして、飛び込んできた光景に瞠目した。

「ははははっ、力を！ 変若を！ 不死を！」

八千亦の持つ剣が、逃げ惑う六番目の姉の首をいとも簡単にはねた。体を離れた首が、七番目の姉の膝もとに落下する。

稲穂が目の前に立ちはだかる八千亦を見上げる頃には、大小十四の肉塊が、社の床を朱に染め抜いていた。

稲穂は声を失った。

初めて目にする惨状を理解できなかった。ただ、床に転がった姉たちが、もう二度と恥ずかしがって袖で顔を隠すことはないのだ――それだけを了解した。

「俺は天上の原へゆく」

血を滴らせる剣先が、稲穂の喉もとにぴたりと当てられた。

「天つ神とやらを退け、日輪を手に入れる。天上の原も、この中つ国もすべて俺のものだ」

「そうはさせぬ！」

八千亦が剣を振り上げるより早く、長い髪をみずらに結いまとめた速風が稲穂の眼前に現れた。

服の上からもわかるほたる火に包まれて、しなやかな筋肉が躍動する。

「日輪はだれの意のままにもならぬ！」

白い金属同士が火花を散らす。

「もはや私にも手が届かぬ。ましてや、おまえなどに」

「なっ……だれだ、きさま！」

打ち合いに負けた八千亦は後退り、かがり火をひとつ押し倒した。「ここら一帯には結界を張っていたはずだ。だれにも入れんはずだ！」

「確かにこの半月ほどは、なにかに邪魔をされて気配を辿れなかったがな」

汗ひとつ浮かべずに、速風は稲穂の手を引いて立ち上がらせた。

「衣装のためか娘らしくなったな、稲穂」

「速凧……」

よろめき、稲穂は速凧の腕につかまった。

足に力が入らない。鼻に、喉にまとわりつく血のにおいに意識が遠のきそうだ。

「ものを知らぬぶん、刺激が強すぎるだろう」

言いながら、速凧は稲穂の頭を撫でた。

「眠っておいてよいのだぞ。おまえは、見なくてもいいものだ」

「でも……あたしは、知らないのは、もういやで……」

「いいや。知るべきではない」

齒こぼれた剣を握りなおし、彼は稲穂を背後に追いやった。

「ほかに知りたいことがあるなら私が教えてやろう。ただ、今は目を瞑っておくのだ」

後ろ手に小さな顔を覆い、有無を言わず目を閉じさせる。

（本当に、教えてくれる？）

稲穂は、焦燥といくらかの安堵をおぼえ、それきり押し黙った。

聴覚だけを研ぎ澄まし、これからなにが起こるのかを闇の中で捉えようとする。

「八千亦といったな。稲穂は私が斬らさぬ。おまえは変若を手に入れることなどできぬ」

速風の落ち着き払った声は、八千亦の神経を逆撫でたようだった。

ただでさえ、あと一步のところで八代をかけた悲願の達成を阻まれたのだから。

変若——若返り。満ち欠けを繰り返す月は、変若の象徴だ。空にあつて手の届かぬ月は、女の内に存在し……。

「おとめの血はおまえのその剣の上で交じり合い、変若の水となる」

稲穂から速風の声が遠ざかってゆく。

「だが、死の虚しさの上の永遠にいくらの喜びがあろう。苦しみもまた永遠につづく」

キン、と高い音が彼の言葉をさえぎった。

「私は、私の日輪を失ったまま生きながらえなければならぬ。それがどんなに……恐ろしいことか」

床がぎしりと呻き、なにかが勢いよく噴き出す音がした。

稲穂は目を開けられなかった。開けてはいけないと、頭のどこかで警鐘が鳴っている。

「——稲穂」

短く呼ばれ、抱きかかえられた。

「いい子にしていたな。ここは空気が悪い、外に出よう」

ようやく目を開けるよう促された時には、半壊した社が天上に手を伸ばそうとするかのごとく高く炎を上げ、空では、星々が赤く瞬いていた。

「これは人里に置いてゆけぬ。神剣ですら敵わぬとは」

速風の手には、根元から折れた剣と、八千亦の剣が握られていた。

白銀に輝くその剣に血の跡はなく、かわりに薄紅色の水しずくが、弾けながら、ぐるぐると刀身を走っている。

「奇な剣だ。……おとめの血、変若……まさか……？」

眉をひそめ、彼が水に指を触れた瞬間だった。

背後に、白の大蛇がうねりながら出現した。

闇空が震える奇声とともに、速風の頭蓋めがけて牙を剥く。

「なっ……！？」

稲穂を胸に強く抱き身を翻した速風は、剣を持った右手に激痛を感じつつ、鋭い顎を血で汚した蛇に向き直った。

「何者だ」

両者、微動だにせずにらみ合う。

稲穂は身じろぎした。

（あの蛇は……白い蛇は、まさか）

どこかで見たことがある。言葉を交わしたことがある。

そう——夢だ。

夢で、出会った。

「月夜！？」

稲穂は体をよじって速風から離れ、制止もきかず、裂けた口の端に赤い口沫を浮かべる蛇のもとに駆け寄った。

「どうして、ここへ？」

蛇は低く唸るだけで、ぎょろりと燃える目を稲穂に向けもしない。

「月夜。月夜でしょう？」

蛇は、一心に速風を凝視している。

その視線の先で、みずらを片方くずした速風が苦々しく顔を歪めた。

「……兄上、か」

途端、大蛇が闇空に跳躍した。

稲穂は巻き起こった風に吹き飛ばされ、地面に全身を強く打ちつけながらも月輪の神の名を呼んだ。

「月夜！ だめよ、だめだったら！」

「稲穂、目を瞑れ！」

「……………いやああっ！！」

命令を無視した稲穂が見たものは——蛇に肩口を深く食いちぎられ、おびたらしい量の血を流しながらのけぞる速風の姿だった。

「ああっ！　だめよ、月夜、だめ……………！」

駆け寄り、倒れた速風を背にかばうようにして、またも襲いかかるうとしていた白蛇に対峙する。

「速風が動かなくなってしまう。ねえさんたちみたいに動かなくなってしまう。やめて、月夜……………やめてえええっ！」

初芽が整えてくれた髪を振り乱しながら、稲穂は涙ながらに叫んだ。

「……………太陽は月を見ぬ。なぜなら速風、おまえがいるからだ……………！」
人の姿に変化した月夜が、稲穂ごと速風を組み伏した。

「姉上は私を見てくださらぬ。同じ父神から生まれた私を愛してくださらぬ。おまえの名ばかりを呼ぶ。死のまぎわでも呼ぶのはおまえの名だ」

うねる黒髪が弟神の首を締め上げる。

速風は兄神をねめつけた。こじ開けた隙間から稲穂を逃し、絡みつく髪を引きちぎる。しかし月夜の髪は、いくらでも再生して弟神を苦しめる。

「ふ……………八千亦に変若を手に入れさせて、憎い私を屠らせようとでもしていたか。愚かな」

息も絶え絶えに速風があざ笑うと、

「おまえは天上の原の厄介者だ」

よく似た顔で月夜が鼻で笑った。

「父神より生まれながら、根の国の女神——父神とは妹背の仲とはいえ、我らとはなんのつながりもない女神に焦がれるなどと。天つ神々は、おまえを女神の落とし子なのではないかと噂しておるぞ」

月夜は稲穂を一瞥し、またすぐ速風を見おろして言う。

「そこの娘に知らず惹かれるのも、女神の血に惹かれているからだ

ろ。ふふ、よもや本当に女神の落とし子ではあるまいな。……姉上はいつも嘆いておられた、おまえのために天上の原は乱れると。天上の原におまえはいらぬ。必要なのは姉上、晝女のみことだけだ」

その時、炎の中で社が爆ぜた。

闇夜に大音響が轟き渡る。

「くっ……ううう」

「月夜!?」

人形を解き白蛇の姿を呈した月夜が、その身に赤く燃え滾る木片を突き刺していた。

「さがれ!」

蛇に駆け寄ろうとした稲穂を速風の腕が制した。その腕と肩から、血が蒸発してシュウシュウと音を立てている。

稲穂は呆然とし、そのさまを見つめた。

「兄上——月夜つくよみな已長のみことは夜の世界と変若を司る神だ。あの程度では死なぬ」

少女を抱き上げながら、速風は、のたうちまわる大蛇をちらりと見た。

「兄上も馬鹿ではない。月のない夜に無茶はせぬはず」
踵を返し、稲穂の髪に顔をうずめる。

「怖い思いをさせてすまぬ。すぐに両親のもとへつれてゆくからな」

「あ……あたし……あたしは……!」

山を駆け下りる速風に、稲穂は風に負けないよう声を張り上げて言った。

「今はおとうさんたちのところへ帰りたくない! その前に教えてほしいことがたくさんあるの。月夜のこととか、天上の原だとか、天つ神だとか……ちゃんと、知りたいの!」

吐く息は日に日に白くなってゆくようだった。

あたたかい春の到来を逃した地上では、暗い空のもと、いつ明けるとも知らぬ闇への怯えが深刻になりつつある。

稲穂は慣れない針仕事に指先を傷めながら、時折り、仮住まいのあばら家から外を眺めていた。火の焚かれた広場では、寒さをものとしないうちもたちが追いかけてこをしたり、ままごと遊びをしたりしている。おとなたちはやや沈んだ顔に、村を訪れた天つ神に対する畏怖と、希望とが入り混じった表情を浮かべている。

稲穂の、以前よりはほんの少しおとなびたおもてにはというところ――いつか初芽たちが見せたような、恥じらいに似た微笑が浮かんでいた。

（みんな勘違いしてるんだから。速風は、あたしの……恋人なんかじゃないわ）

憤慨してみながらも、その唇を幸せそうにとがらせる。

彼女のとなりには、みずらを解き、背に髪をゆるやかに流した速風の姿があった。

「なんだ？ うまく縫えたのか？」

酒を舐めながら稲穂の手もとを覗き込む。

「うん、ずいぶんうまくなったな」

「……ほんと？」

「ああ。なにせ最初は、指を縫うほうが多かったからな」

「……もう、そんなことはしないもの」

ふたりがこの海近くの村に落ち着いて、半月ほどがたっていた。稲穂は仕事も人並みの人付き合いも不器用ながら、速風はもちろん村人全員が目を丸くするほど懸命に働いた。昼の休み時間は同じ年頃の娘たちと過ごし、少しずつ恋を学んだ。

そして夜は、速風の語りに耳を傾けた。

天つ神々の住む天上の原。国つ神と人間の住む中つ国。さらに地の奥には黄泉、根の国。三つの国が、世界を形作っているということ。

かつて中つ国を産んだ男女の神は、ゆえあつて仲たがいをしたということ。そのために天つ神々は、根の国の女神につらなる者を嫌うこと。稲穂や七人の姉たち、それに老いた父母は国つ神で、女神の血を引いていること。

暗闇がつづくのは、晝女のみことが身罷られたからであること。このままでは、天上の原も中つ国も凍えきってしまうこと。

速風は、天つ神々により天上の原を追放されたのだということ――

「姉上が私を遠ざけられたのは、天つ神々の不満を消し去るためなのだろう。姉上は争いを好まぬ方だからな」

速風は話の継ぎ目ごとにそう言つては、苦しげに目を細め、ごく小さなため息をついた。

まるで己に言い聞かせているかのようなその仕草は、稲穂のふくらみかけた胸を打ち、無性に切なくさせた。

（恋人……か）

稲穂は手を休め、スンと鼻を鳴らせた。浮ついた気持ちがすつと冷めてゆく。

（村のみんなは羨ましがるわ。あたしを、神様のお嫁さんだと言つて。そう言われて、嬉しく思ってしまうのは……あたし、速風のことが好き、なのかしら）

唇をなめ、一文字に引き締めた。

（でも。たしかに一緒に住んではいるけれど。本当に恋人なら、きつと……こんな淋しい気持ちにはならないわ）

すぐそばに彼はいるのに、自分を見てほほ笑みさえするのに、胸の奥を冷たい風が吹くような心地がしてたまらない。

（速風のおねえさん、晝女のみことはあたしとちょっと似てるって速風は言つてた。あたしは根の国の女神の血を引いているから、速

風が惹かれるんだって。月夜はそう言ってた)

稲穂自身もまた、彼に月夜の面影を見ていることに気がついてはいた。

幼い頃からずっと見つめつづけていた月、身近に感じていた月。

……切ない憧れ。

でも、それは、「好き」という気持ちとは少し違う気がしていた。
(月夜のことが好きなら、きっとあの場にとどまったはず。あたし、怪我をした月夜を放ってきてしまったもの)

ならば、やはり速風を好いてしまったのだろうか。思えば最初から、不思議と惹かれていたのかもしれない。

(夢で月夜と会ったのは、速風と出会ったあとだわ)

速風に、月の神の面影を見ているというよりは……。

(月夜が速風と似ていたから。そして、月の神様だったから。だからあたしは、月夜を愛しく思ったの?)

そこまで考えて、ふと目頭が熱くなった。鼻の奥がツンとして、こめかみをぎゅっと押しつけられたような心地がした。

あれほどまでに姉神を強く想っているというのに、月夜は、誰よりも最上に愛されることはないのだ。稲穂にさえも、弟神の身代わりに想われたただけだ。

(あたしと一緒にだわ、月夜は)

ひと針、縫いかけてやめる。

(あたしは、速風にとっておねえさんのかわりではない。それとも、根の国の母神さまの……。あたしがどんなに速風を好きになっても、おねえさんがもし生き返って、速風を求めたら)

認めてしまえば、すべてが虚しくなりそうで怖かった。

(何を見ているの。何を求めているの。報われないのに。心の底から望んでいるものは手に入らないのに)

いつのまにか、空には満月が真白に輝いていた。広場はガラんとし、かがり火の燃えかすがチリチリと小さな音を立てて闇を焦がしている。

（あたしだけを見て）

ふと、後ろを振り向いてみる。地鼠が一匹、所在なざげにしている以外に生き物の気配はなく、あばら家の片隅に巢食う闇はひたすら無言だ。

稲穂は強い孤独を感じた。

でも、ほかのだれを見ることなく自分を愛してくれるだろう父と母のもとへ帰ろうという気には一向になれなかった。姉たちのことがどうしても頭にあるからだ。

（おとうさんたちとねえさんたちは仲たがいをしていたんだと思う。天つ父神さまと、根の国の母神さまみたいに）

八千亦を受け入れられなかった両親と、受け入れた七人の姉。でも、姉たちはその八千亦の手により殺されてしまった。父と母は、姉たちを愚かだと笑うのだろうか？

国産みの夫婦神は、なにを食い違つて仲をたがえたのだろう。どうして天つ神々は、母神の血を憎むのだろう。

（わからないことはまだ多いわ）

諦めに似たため息が紅い唇からこぼれた。

（太陽がいなくなっても、人は営みを忘れない。このままで……いいじゃない）

及び腰な考えが首をもたげ、針を持つ手を震わせた。

穏やかな日々だった。このゆるゆるとした毎日に満足することができるなら、それは幸せなのだと思う。肝心なものは闇に隠れている。求めなければ、見ないままですむ。

……変わらない。今が、つづく。

やがて、この世が闇と氷に淘汰される日がくるとしても。すべては、闇が連れ去ってくれる……。

ため息は、止まらない。

「どうした？」

考え込んでいたので気づかなかったが、速風はずっと息が吹きかかるほどそばにいたようだ。

「なに、速風」

少しうろたえて反対に問い返すと、彼はいつもらしからぬ張り詰めた面持ちで残りの酒をあおった。酒の香がほのかに漂う。

「寒くないか」

そう言つて、稲穂を抱き寄せた。

「な、なによ」

びっくりした手から針と衣が落ちた。急激に高まってゆく鼓動にさらに驚く。

こうして肌が触れ合うのは久しぶりだ。ほたる火の体は春の日差しよりずっとあたたかい。耳もとに吹きかかる呼気は熱いほど。

それなのに、彼は「寒いな」とうそぶいた。抱き締める腕に力がある。

「稲穂はあたたかいな」

切ない呟きだった。ぬくもりを求めるように、速風は顔を少女の胸にうずめた。

「酔ってるの」

稲穂は身を固くして抑揚のない声で聞いた。

腰にまわされた手が、衣ごしだというのにひどく生々しく感じた。指は器用に衣をたくしあげてゆく。

「やだ……」

ますます硬直してゆく体を解きほぐそうとでもするように、速風の指の腹は、いくらかふくらんだ乳房をやや遠慮がちにまさぐった。横たえられた二つの体が冷たい床を温めてゆく。長い髪と髪が絡まり合い、唇は途切れることなく重なり合い、吐息はまじり合い互

いの熱を高めてゆく。呼び合う名が、闇に溶けて同化してゆく。

「……あたしは、晝女のみことじゃないよ」

「わかつている。おまえは稲穂だ」

速風は仰向けになり、はだかの胸に向かい合う形で稲穂を抱いた。

「私はこうして肌を合わすことが好きだ」

「……ふうん……」

「相手と、己の中にある感情を確かめられるからな」

「そうなの……？」

意味がわかりかねるといった顔つきの稲穂に、速風は短く声を立てて笑った。

「不安なのだ、いつも。相手が私をどう思っているか、私が相手をどう思っているか。……愚かだろう」

彼の問いに、稲穂はただ首を振ることしかできなかった。

（あたしこそ愚かだわ）

抱かれてもなお、速風を信じきることはできそうもない。

速風は少なくとも稲穂を、「姉上」とはただ一度として呼ばなかった。身代わりなどではない、稲穂を稲穂として……愛した。なのに。

速風が目を閉じたのを確認して、そつと唇を噛んだ。

（わがままなあたし）

父と母から、過度とも言える愛情を注がれて育ってきた。父の目が、母の目が見つめるのは稲穂以外の何者でもなかった。それが、彼女にとつての「普通」だった。

稲穂は、欠けることのない愛情を欲していた。——だから。

不安で、しかたがない。

「眠らないのか？」

速風がけだるそうに目を開けた。

「一緒に眠ってくれ、稲穂」

傷痕一つない手が、黒髪だけをまとう稲穂の背をやさしく撫でる。稲穂は泣きそうになった。泣きそうな顔に、微笑をたたえた仮面

をかぶった。

「速風があたしをどう思っているか、ちゃんとたしかめられた？」

極力、目を合わせないで聞く。

速風の体が、ほんの少しだけこわばった。それが伝染したかのよう
に稲穂までもが呼吸を止める。

「……愛しく想うよ」

彼はそれだけ言って、すうと空気を肺に取り込みながら瞼を閉じた。

稲穂は、仮面を外さぬまま寝顔を見おろしている。

（もしおねえさんが生き返って、振り向いてくれたら、そっちへ行
つてしまふんでしょ？）

心の声の問いかけに、速風はこたえるはずもない。

*

久しぶりに夢を見た。と、夢の中で思った。

稲穂は白蛇の背に乗っている。蛇は薄ももいろの綿雲を食^はみながら、背の少女を気遣いながらゆっくりと移動する。

「このあいだの傷はだいじょうぶ？」

尋ねると、蛇はなんでもないとでもいうふうに頷いて、かぶりを振った。

あたたかいのか、冷たいのか、たゆたう綿雲とかすみは不思議な温度をもつて少女と蛇を取り囲む。

「……なぜいたわる。なぜ、憎まぬ？」

控えめに振り向き、蛇が口をひらいた。

「私は、私の手を汚したくないばかりに……八千亦に変若の水を手
に入れさせて、速風を屠るために、そして、……を、得るために。
おまえには死んでもらおうと思っていた。それを、知ったのだろう
？ なのになぜ、私を憎まぬ」

「なぜって」

聞き逃した言葉があるなと思いながら、稲穂は後ろ向きに倒れた。背に、衣ごしの月夜の腕を感じた。

「あたしは月夜を大事に思うから」

速風によく似た顔を両手で包み、につこりと微笑む。

月夜は視線をさまよわせながら、稲穂の首筋にくちづけた。

「……私は。姉上が私を見てくれぬ淋しさを、おまえで埋めようとしてしまう。おまえは姉上に面差しが似ている」

わかりきっていた告白に、稲穂は精一杯の笑顔でこたえてみせた。「そういうのは、月夜だけじゃないわ」

波打つ髪を撫でながら、天上の原を統べるという日輪の女神をかすみの表面に思い描いてみる。ゆらゆら揺れるかすみは、川の水面と同じに稲穂の顔を映す。

「血がつながっているんだもの。似ていても変じゃない」

言葉を区切り、月夜の耳もとに唇を寄せる。

「でも。あたしはあたしなんだよ。晝女のみことのかわりじゃない。あたしは稲穂。あたしを見て。稲穂を見て。ちょっとだけとお裁縫もうまくなったの。あたしを見て。あたしは稲穂。晝女のみことじゃない」

「わかつている。泣くな」

「わかつてるなら、もう求めないで。いや、いや……あたしは稲穂なの、速風、信じたいの、かわりだなんて思わないで、信じたいの、速風……っ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2246z/>

闇に踊る物語

2011年12月18日08時50分発行